

きらめき大賞

希望の光

情報電子工学科5年 妹尾北斗

今日も病室で一人、もう何度も読み返した漫画を読んでいた。入院してからもう一年と半分くらいだろうか、僕はもういつの間にか小学五年生になっていた。毎日何もしないで外を眺めて過ごす日々。別にやりたいこともなく、何もかもがどうでもよかった。一秒でも早く一日が終わってくれればいい。面白いことなんて何もない、くだらない毎日だった。そんなある日、海外出張から帰ってきた父さんがプレゼントを持ってきた。父さんは僕のところまで歩み寄るなり

「ケンイチ、良いものを持ってきたぞ。開けてみろよ。」

そう言って僕に箱を渡した。それは一目見てずいぶん古い物だと分かる、よく分からない模様が隅々まで丁寧に彫られた木の箱だった。恐る恐るそれを開けてみると、中には生まれたての赤ん坊ほどもある、画材屋さんで売っているような絵描きの人が使う木製の人形が入っていた。手や足の関節が動く、のっぺらぼうのその人形。これもまたかなり古い物みたいで、その人形は元の色よりも黒くくすんでいた。

「なんだこれ、こんなものどうしろっていうのさ？」横にいた母さんも、同じ気持ちなのだろう、僕と一緒に顔をあげる。父さんは、その反応をあらかじめ予想していたのか、少しもうろたえる様子もなく、むしろ少し自慢げにその人形を手にとると、それを僕に持たせて

「そいつの頭に目をつぶって自分のおでこを当ててみな。」

いかにも何か企んでますって顔で僕に言った。どうせまた何かつまらないことを考えてるんだってバレバレだったけど取りあえず父さんの言う通りにしてみた。

するとその瞬間、人形はまばゆいばかりに光り出した。目をつぶっていた僕の視界は真っ白になり、おでこを伝って僕の意識が人形へと流れ込んで行く様な気がする。いや、流れ込むというよりもむしろ人形に僕の記憶や意識を吸われているような感じだ。なんだ、どうなってるんだ？僕はとっさにその人形を引き離そうとしたけど体が言うことを聞かない、それに目も開けられなかった。どうなってるんだ、やばい！絶対やばい！そう思ってるうちに人形から光は消え、僕は人形をベッドの上に投げ



捨てた。母さんは目の前で起こったことが何だったのか理解しきれていない様子で口をポカンと開けていた。僕は父さんに

「なんなんだよこれは！一体どうなってんのさ！？」汗でびしょりになった顔をパジャマの袖で拭きながら叫んだ。父さんは相変わらず余裕の表情で

「まあ落ち着いて人形を見てみる。」訳がわからないまま僕はその人形に目をやると、なにやら人形がもぞもぞ動いている。それから人形はむくむくと膨らみだして、のっぺらぼうだった顔が徐々に誰かの顔を形成し始め、ただ丸いだけだった手は先が五つに分かれ人間の手の形になっていった。その木で出来た人形はみるみるうちに人間の姿へと変わっていった。

僕の目の前でまるで風船を膨らましたように大きくなった、ベッドに座っているその人形はまるっきり人間の姿になった。そいつは僕のほうに顔を向けると「やあ。」とまるで寝起きのような顔でヘラヘラと笑った。こいつは一体誰なのか。いや、僕はこいつをよく知っている。こいつは……僕だ。服は着てなかったけど、そのいつも眠たそうな感じの無気力な目、少し癖の入っている髪の毛、ずっと外で遊んでないせいでまったく日焼けをしていない痩せっぽちのその真っ白で貧相な体、頭の前から丸つきり僕だった。

「どうなってんの？こいつは僕だよな？」

「ああ、そうだ。こいつはお前だケンイチ。これからこいつがお前の代わりに学校へ行ってくれる。」

「そんなことしてくれなくていいよ。こいつが僕の代わりに学校へ行ってもどうすんのさ。どうせ僕は学校へ行けないんだ。こいつが学校へ行ったからってどうなるわけでもないじゃないか、まるで意味がないよ。」

「まあまあそう言うな、それにこいつにはもうひとつ特別な能力があるんだ。」

「はあ？どんな能力があるっていうの？空でも飛べるってわけ？それとも死ぬほど頭がいいとか、オリンピック選手並みの運動能力があるとか？」

「いいや、こいつはお前自身だ、頭の良さも運動神経もお前とまったく同じ。まあ、こいつの能力は明日になればわかるさ。楽しみにしてな。明日から毎日が楽しくなるよ。」

そう言うと父さんは取りあえず家に帰るといって、そいつに僕の着替えを着せると母さんと一緒に三人で帰っていった。そいつは帰り際に「じゃあね、また明日。」と

言って笑顔で手を振った。その笑った顔もやっぱり僕にそっくりだった。

次の日の夕方、父さんは学校帰りなのかランドセルを背負ったそいつと一緒に僕の病室まで来た。

「本当に行ったんだね。」

「ああ、もちろん。俺は行ってないけどな。」

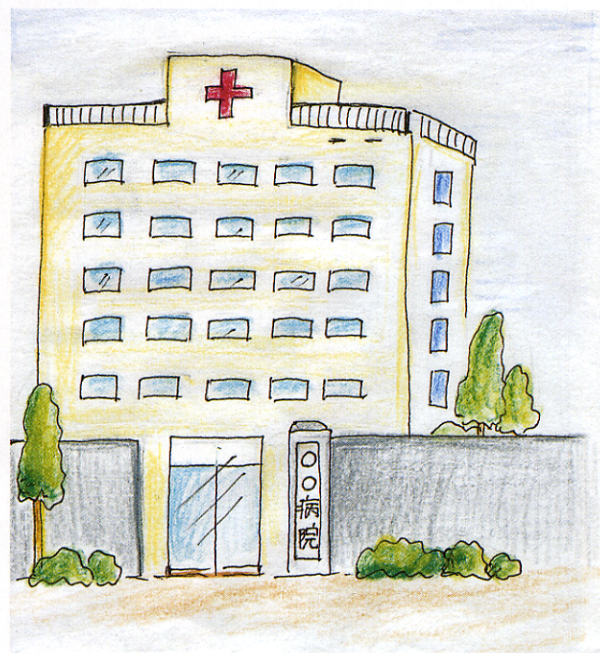
「で、どうなの？僕はいつもとぜんぜん変わらなかったけど。」

それを聞いた父さんはふふっと笑いそいつの背中をそっと押した。そいつはこくと頷き僕にゆっくり近づいてきた。ベッドに座った僕の前までくるとそっと僕の頭に両手を回し、

「さあ、目をつぶって。」

父さんの方を見ると、父さんは僕を促すように大きく頷く。少し不安だったけど僕は言う通りに目をつぶった。するとそいつは僕のおでこに自分のおでこをゆっくりと合わせた。その瞬間、僕の頭の中にそいつの意識が、記憶が流れ込んできた。

久しぶりに学校に出てきた、忘れかけられた僕を、驚きの顔で見つめるクラスメート。それからみんなが机に座った僕を取り囲み、もう大丈夫なのかとか、病院はどうだったとか色々質問されている。それからみんなとひとつの教室で授業を受けて、給食の時間になるとみんなで机を合わせてワイワイと話をしながら食べた。昼休みにはドッジボールが始まり、小さい頃から運動神経は人並み以下の僕はあっさりアウトになったけど、仲間からパスをもらって一人だけアウトにすることが出来た。それからまた授業を受けて迎えにきた父さんの車に乗ってみんなにさよならを言って帰ってきた。



僕はまるで実際に体験してきたような気がした。久しぶりの給食の味、一人で食べる病院の味気ない食事とは違い、みんなで食べる給食は本当においしかった。ボールを当てられたときの痛さや、アウトを取れたときの興奮。すべてがリアルで、僕は長い間感じていなかった充実感を心から感じていた。

「すごい！これが君の能力なの？」

「そうだよ、学校へ行けない君の代わりに僕が行って、こうやって君に伝える。僕は君だ、僕が体験したことは君が体験したこと。僕は君の分身なんだ。」

僕はもう一人の僕になんともいえない親近感がわいた。

「どうだ、気に入っただろう？」

興奮気味の僕に父さんが声をかけた。

「うん！最高だよ！ありがとう父さん。でもこれから

このもう一人の僕を なんて呼べばいいのかな？」

「そうだな二人目のお前だからケンジなんてどうだ？」

そのまんまじゃんって思ったけど

「いいね。じゃあケンジ、これからよろしく頼むよ。」

そう言って僕は右手を差し出した。もう一人の僕、ケンジは嬉しそうに頷くと右手を出して僕らは堅く握手をした。父さんとケンジが帰った後も僕の興奮はなかなか収まらなくてその日はなかなか眠れなかった。

次の日も夕方ケンジは僕のいる病室に来てその日一日の体験を伝えた。その日の僕は音楽の授業で使う縦笛を忘れて先生に怒られた。

「おいおい、頼むよケンジ早速忘れ物なんかしないでくれよ。」

「ごめんごめん、でも仕方ないだろ。ケンイチが抜けてるから悪いんだ。」

「それもそうだね。」

僕らはこの奇妙な会話がおかしくて、まったく同じなその顔をつき合わせて笑った。しばらく父さんと三人で話をしてケンジと父さんは家へ帰って行った。そして次の日もそのまた次の日もケンジは学校へ行って、夕方に僕の病室までやってきてその日の体験を僕に伝えてくれた。休みの日になるとケンジは朝から僕のいる病院へやってきて、ケンジが持って来てくれた新しい漫画を読んだり話をしたり、夕方まで僕と一緒に遊んでくれる。ケンジの持ってくる漫画はどれも面白かったし、僕の小さい頃の誰にも言えない恥ずかしい失敗の話は最高に盛り上がった。僕の知ってることはケンジも知ってる。何から何まで双子以上に僕とケンジは、好きな食べ物から女の子の趣味まで一緒だから話が合わないわけがなかった。

ケンジがやって来てもう一ヶ月が過ぎ、すっかりクラスにとけ込んだ僕は、仲のいい友達もできた。最近の僕は自分も学校へ行ってみたいと思うようになっていた。病気になったばかりの頃は早く学校へ行きたいと思っていたけど、何ヶ月も病院から出られない日が続くうちに僕は学校へ行くことをすっかり諦め、最近では学校なんかどうでもよくなっていた。でもケンジが代わりに学校へ行ってきて、その体験は僕の体験になる。すべてがリアルに。学校は最高に楽しいところだった。授業は正



直退屈だったし体育の授業は好きになれなかったけど、みんなで食べる給食や昼休みにやる鬼ごっこやドッジボールはどんな漫画やテレビ番組より楽しかった。病院じゃ絶対することが出来ないこと。僕は学校へ行きかけた。

「病は気から」。世の中にはこういうことわざがある。最近僕は調子がすこぶる良好だ。先生も僕の回復ぶりに驚いている。何ヶ月経っても一向に良くなる様子もなかった病気がここ数日で自分でも驚くほど良くなっている。父さんも母さんも僕の回復ぶりに手放しで喜んでた。先生はあと少しで退院出来ると言ってくれて、看護婦さんもよかったねって言ってくれた。だけど、ケンジだけは違った。僕が元気になっていくのに反比例するように元気がなくなっていく。二人で話をしている時もケンジはよくため息をつくようになった。

「どうしたの？具合でも悪いの？」

「ううん、何でもない。病気よくなって良かったね。」

言った後にまたため息をつく。一体どうしたっていうんだろう。気になったけどそれよりも僕はもう少しで学校へ行けるんだっていう喜びで胸が一杯だった。僕はもう一人で病院の中を歩けるようになっていた。

だけど日曜日の夜に事件が起こったんだ。土曜日、先生が月曜日から学校へ行けるって言ってくれた。それで次の日僕は、看護婦さんたちに見送られて病院を退院した。退院祝いをしようと、その日の夜、父さんと母さん

が家でご馳走を作ってくれていた。父さんはビール、母さんは烏龍茶に僕とケンジはジュースで乾杯してから、みんなでテーブルに並んだ盛りだくさんの料理を食べ始めたんだけど、ケンジだけはずっとうつむいたまま箸をつけようとしなかった。母さんが「どうしたの？」って聞いても返事をしなくて、僕も父さんもケンジを見た。隣に座ってた僕は

「どうしたんだよ？最近ちょっと変だぞ。」

そう言っとうつむいたままのケンジの顔を覗き込んだ。するとケンジは急に顔を上げ椅子を下り僕のすぐ横に立った。その眼は大きく開かれ血走り、何か思いつめたような顔をしている。ケンジは僕の両肩を掴み信じられない言葉を見た。

「ねえケンイチ、学校へ行くのやめなよ。」

「はあ？何言ってるんだよ。もう大丈夫だよ、先生だってそう言ってるだろ。」

「そうじゃないんだ、学校へなんか行かなくていいって言ってるんだよ。だってそうだから、今までどおり僕が学校へ行って君にそれを伝えれば、君はまるで自分が学校へ行ったように伝わる、それでいいじゃないか、なっ、そうしようよ。」

肩を掴む手に力が入る。痛いほどに力を込めたその両手を僕も立ち上がりながら振り払い言い返す。

「やだよ！僕は明日から学校へ行って、クラスの皆と教室で勉強したり遊んだりするんだ。もう一日中一人で過ごすのはまっぴらだよ。いきなりどうしたん



だよ、お前はもう学校へ行かなくていいんだよ！」
 その時ケンジの態度が急変した。
 「お前は本当にわからない奴だな！お前は明日も明後日もこれからずっと学校へは行かせない。俺が代わりに行ってやるって言ってんだよ。いいから黙って俺の言うことを聞けよっ！」
 「うるさいっ！お前なんてもう要らないんだよっ、お前のことを信用してたのになんなんだよいきなり。お前はさっさと元の人形にもどっちゃえよ！」
 「ケンイチ……。」
 ケンジは怒りや憎しみなんかじゃなく、哀れみと悲しみを含んだ、今にも涙が出てきそうな目で僕を見た。
 「そう・・・分かったよ。もう僕は必要ないんだね。」
 「ああ、もう君は必要ない、明日からは自分で学校に行ける。もう僕は一人で十分だ。」
 「・・・そう、そうだね、じゃあ僕は元の姿に戻るよ。」
 そう言ってケンジは父さんのほうに目をやった。
 「・・・そうか、分かった。ケンジを元に戻そう、そのかわりケンイチ、ケンジはもう二度とお前になることは出来ない。一度コピーした人間にはもう二度となれないんだ、元に戻して後悔しないな。」
 「あぁいいよ。僕にはもう必要ない。」
 「よし、じゃあケンジを元に戻そう。その前にケンイチ、お前は知っておかなくちゃならないことがある。」

「えっ？知っておかなくちゃならないことって？」
 父さんはケンジのほうを見る。ケンジは黙って頷き、父さんはケンジのところへ歩み寄る。そして耳元でケンジに何かつぶやいた。ケンジは少し考えたようなそぶりをして僕のほうへ向き直り、僕の目の前にきた。
 「ケンイチ、これから君に本当の記憶を見せるよ。はっきりいってかなりショックなものだと思う、でもこれから君に見せるものは全部現実だから。」
 「どういうこと？」

ケンジはその質問に答えずゆっくりと僕に顔を近づけ、おでこを合わせた。その瞬間、ケンジの持つ記憶が僕に流れ込む。

いきなり登校し始めた僕は登校初日からクラスに溶け込めてなかった。それどころか完全にクラスから浮いていた。皆は仲の良いもの同志机を合わせて給食を食べているのに僕は誰とも机を合わせてもらえず隅っこで一人給食を食べている、一人で食べる給食は少しも美味くはなかった。昼休みにはドッジボールで1対10。皆から何度もボールをあてられる。いじめはどんどんエスカレートしていった。ある朝学校へ着くと僕の机は端っこにどかさされていて、机中に落書きがされている。クラスの男子に囲まれ無理矢理ズボンが脱がされなされる毎日。毎日毎日浴びせられる言葉、死ぬ死ぬ死ぬシネシネしねしねしねしね……

僕はあまりの辛さに耐えられずにケンジを引き離そうとしたけど体に力が入らない。体中から脂汗がにじみ出



て、大きく見開いた目からは涙がボロボロ出てくる。

「もう許して。お願いだからもうやめて。もうやめてよ、ねえもうやめて、やめて・・・。」

僕は何度も何度も繰り返した。ケンジは静かに目を閉じたまま止めようとはしない、目をつぶっている目から涙が流れている。僕がケンジと出会ってから今日までの記憶が全て終わるとケンジはおでこを離した。僕は立っていることが出来なくてその場に崩れるように膝をつき、手をついて今まで食べたものを全部吐いた。気がおかしくなりそうだった。

「嘘だ、こんなの全部嘘っぱちだよ。そうでしょ？
ねえ父さん。」

なんとか顔だけ上げて父さんをみた。父さんは膝をついて、四つんばいになった僕の肩に手をおいた。

「今お前が見たもの全て本当のことだ。今までお前が見てきたのはケンジが作った偽りの記憶。本当のお前は学校でいじめを受けてる。俺も最近お前のクラスの担任の先生が家に来て、その事を聞かされるまで知らなかった。ケンジは今までずっとお前にも、俺や母さんにさえその事を隠してお前の代わりにずっと学校へ通い続けてくれてたんだ。」

「そんな、それじゃケンジは今までずっとこんなひどいことをされ続けてたってわけ？ なんでさ、なんでそのことずっと隠してたんだよ？」

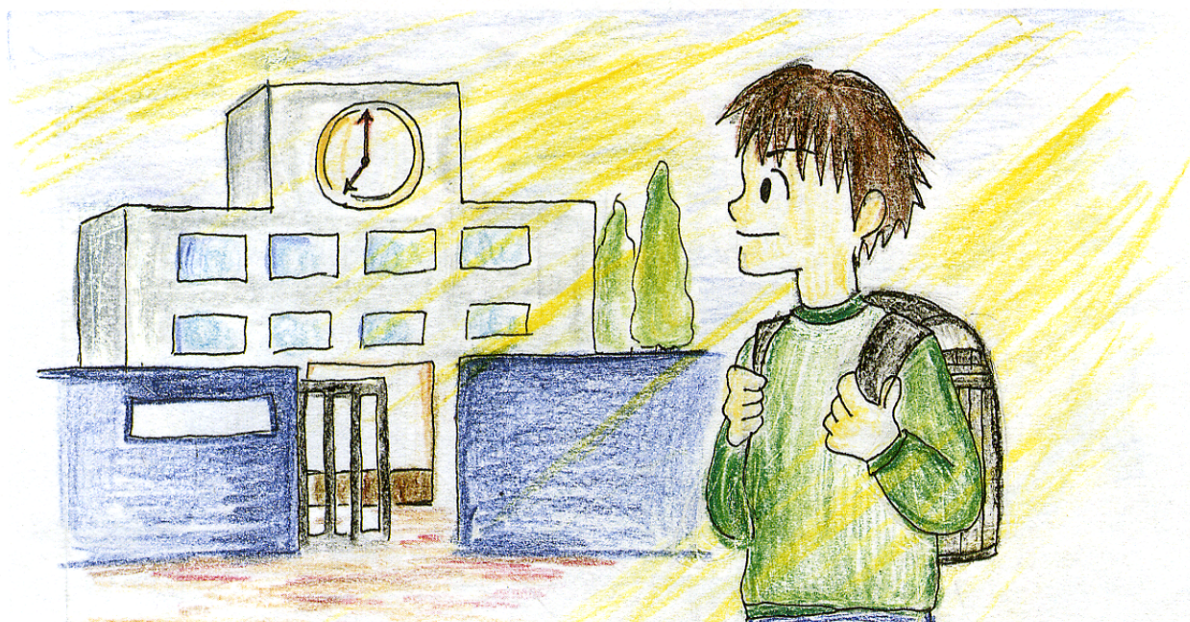
「僕が君になったとき、ケンイチの心は暗闇に閉ざされてた。自分の将来に対する夢や希望が全くない、

絶望の闇で埋め尽くされた無邪気な心。君の心に光を照らすには何か目標がなくちゃいけなかった。

今の状態から抜け出そうとさせる道しるべが必要だった。だから僕は毎日楽しい学校生活を君に伝え続けた。君はそれを見てどんどん元気になっていったよ。心にしっかりと希望の光が差し込み始めたんだ。そんな君を見ていれば学校でどんなひどい仕打ちを受けても平気だったよ。僕は君の身代わり。君が元気になりさえすれば僕はどうなってもかまわない、それが僕の使命なんだから。僕はケンイチが学校へ行って現実を知ったとき、心の中にある希望の光が消えてしまうのが怖かった。僕はもう元の姿に戻るけど、君にはいつまでも心に希望をもって生きてほしい。希望があればどんな状況でもやってくれるんだから。」

ケンジは優しい顔をしていた。父さんは小さく何度か首を縦に振り、ケンジの肩を抱き耳元で何か呪文のような言葉を囁いた。するとケンジの顔からは表情が消え、目や鼻もなくなっていく、手足がみるみるうちに縮み、ケンジは元の古ぼけた木の人形になった。ケンジの言葉は、いつまでも僕の耳に残った。

結局僕は転校することになった。次の学校では上手くやっていけるだろうか。もしかしたらまた同じような仕打ちを受けるかもしれない。もしそうなったら僕の最高の友達が教えてくれた最高の言葉を思い出そう。どんなに辛い状況でもきつと乗り越えられる、とても素敵な言葉 —— 「心に希望を」



優 秀

詩歌部門 短歌

C-96C-2001

土木建築工学科四年 田邊奈津子

じー玉のごとき飛沫が跳びはねて

夏顔の風涼しさを

坂道を駆け抜けるよな一途を

恋をしているまぶ口禁

夏のバス後見美しき女性いたりとい

我が男であればと思ふ

君を待つ「スモスと並んで君を待つ

言い訳と来る君を待つ

あなたとは期限つきの恋をわづ

一年草のマンローランド

三日月の朧をじら君の本心を探せぬころ

探れぬころ

待ちし時間が深まれば悲しみや

蒸陽花の藍も濃くなりき

「九州が見える」というその海岸で

君の本心を見たいと思ふ

黄色したチコーリンのふゆ恋をじら

じらひの恋は赤いふゆ恋ひさび

親指の唇に噛んだ「アム」着て

君まで駆ける最短キョリで

言いだげに頭を垂らす言わぬ

熟れぬ理由をその果てしめて

優 秀

読書体験記部門

食べることと生きること

2年1組 幾度明菜

人間には、生きる力が備わっていると思う。思っているよりタフで、少々のことには耐えられるのだと思う。

この本の主人公、みかげのように、「いつか死ぬ時がきたら、台所で息絶えたい。」とは思わないが、私は台所が好きだ。私を魅了するのが、貯蔵されている食料なのか、可愛らしい台所用品なのか、それとも台所特有のあの温かい空気なのか分からないが、とにかく私は台所が好きだ。買い物に行って、棚に並べられた瓶詰めの調味料や、壁からぶらさがっているフライパンをみていると、どうしようもなくわくわくしてくる。どこかへ何かを食べに行っても、私は好奇心を抑えることができない。それが「お食事」であっても、ファミレスでのランチでも、ふらっと立ち寄るファーストフード店でも、私は舞台裏、つまり厨房を覗きたい衝動にかられる。結局、私は食べ物を作る場所に目がないらしい。

だから、みかげが台所で寝ていた気持ちが少し分かる。私もし、肉親を亡くして一人になったら、やはりみかげと同じように台所で寝るかもしれない。安心できる、冷蔵庫のそばで。

近すぎる人じゃ駄目な時ってあると思う。家族でも、親しい友達でもない、いわばただの知り合いがそばに居てくれることで癒されることも、絶対あると思う。みかげにとって、それは雄一とえり子さんだった。常識的に考えて、「亡くなった祖母の行きつけの花屋でアルバイトしていた人」に、家に来るように言われて、素直に従う人などいない。いくら住む所に困っていても、普通は警戒する。第一、そんな申し出をする人も尋常ではない。そういう滅多に起こらないことが重なって、ほとんど知らない人の家に居候することになったわけだが、それは、祖母を亡くしたばかりでまともに物事を考えられなかったからそうだった、というのではない気がする。みかげは、どこか心の深い所で、その時の自分に必要なものを知っていたのだと思う。

何かあって、時には何もなくても、妙に落ち着かなくて不安なとき、私は無性に一人に成りたくなる。そんな時行きたい場所は台所ではない。できれば、外がいい。そういうわけで私は、時々、庭で一人ぼっちと星を眺める。学校であれば、屋上に続く階段の一番上に座り込む。



鍵のかかっているドアが恨めしい。屋上、開放して
くれないかなあ……。

雄一が母親であるえり子さん（本当は男なのだけ
れど）を亡くしたとき、彼は旅に出た。日常から離
れたのだと思う。私は、どんなに辛いこともきちん
と受け止められる人間でありたいと思うが、息抜き
も必要だと思う。屋上に行きたければ行けばいいし
、旅に出たければ出ればいい。なんとなく何かした
くなって、それをやってみて、そうやって人は自分
を保ちながら生きているのだと思う。雄一が旅に出
たことと、えりさんが昔、妻を亡くして、女とし
て生きていく決意をしたことは本質的には変わりな
い。人間に備わっている力がそうさせたのだと思
う。運命論者ではないけれど、なるようになるし
、不確かなものに身を任せるのも悪くないと思
う。

カツ丼だった。誰が何と言おうと、雄一を救った
のはみかげが持って来てくれたカツ丼だった。やは
り食べるこの持つパワーはすごい。台所の持つ魅
力も、それと近いもののように感じる。

私は、どんなに気持ちが沈んでいても、食欲がな
くなることはなかった。辛くても、苦しくても、ち
ゃんと物を食べることができた。食欲不振なんてい
う言葉は、こ

れからもずっと、自分とは無縁のものだと思っ
ていた、ついこの間まで。正直言って、かなり驚
いた。全く食べられなかったわけではないけれど、
少しだけ体重も落ちた。よほどショックだったん
だな、と自分を分析してみたりもした。食べたく
ないんだから、食べなければいい。そう思ってい
たら、いつの間にか普通に食べられるようになって
いた。このことは、私にとってはちょっとした出
来事で、同時に、いつ誰にでも起こり得ること
でも、みかげが雄一に届けたカツ丼くらいには特
別なことだと思う。

それだ、不安な時に行きたい場所が台所でない
理由。心が深く沈んでいる時、食欲がなくなるよ
うに、不安な心は、食と深い関わりがある台所の
持つ空気に耐えられないのだろう。果物屋の前で
思わず歩をゆるめたり、きれいなお皿に見入り
たりしてしまう時の私は、きっと生きる力にあふ
れているのだろう。私は台所が好きだと今改めて
思う。私はこれから何度も、ふとした思いつき
で星空を眺めたり、屋上に登ったり、旅に出たり
するだろうけれど、ちゃんと台所に戻ってこられ
たらいいな、と思う。

